# 婦人と新社會

山田わか主筆

## 七月號

猿眞似外交

一革命としての婦人運動

婦人運動の一大缺陷

生命の宗教と婦人運動

破壞より建設へ

漸く全力を擧げて研究する境に到達した私

めッき生活の流行

大正十三年六月廿三日印刷納本

毎月一回一日發行　第五十二號　大正十三年七月一日發行

東京市婦人と新社會出版部發行

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

# 猿眞似外交

子供の讀む讀本に猿眞似と云ふのがある。南洋の或る港に着いた船に乘つてゐた一人の水夫がいくらかの金を儲けようと思つて持つて來た帽子を澤山かついで、土人の住む部落へ行かうとして山道へ差しかかつた。餘まりに暑かつたので涼しそうな木かげに腰を下して休んで居る間に、ツイ、ウト〱と眠つてしまつた。フト、目を覺すと傍に積んで置いた帽子が一つも無い。びつくりしてあたりを眺め廻すと樹木の中に澤山の猿が居て其の猿共が皆一つづゝ彼が持つて來た帽子をかぶつて居る。どうにかして取り返へそうと思つても、高い樹の上を自由に飛び廻つてゐる猿共であるからどうにもならない。あせりにあせつた上句、ツイに絕望して水夫は自分が被つて居た帽子をひツ掴んで地面に叩きつけた。すると、猿共も皆一樣に被つて居た帽子を地上に投げ付けたので水夫は持つて來た帽子の全部を無事に取り返へした。と云ふ話である。

勞農露國は恰も此の水夫の行動を眞似て世界各國を猿になぞらへようとした。世界中に革命を起さうとした。けれども、歐米がどうしても猿になることを肯んじなかつたので、今度は東洋諸國に其の手を試みようとしてゐる。今の勞農政府の生命は外交政策に集中されてゐると云はれてゐる。つまり、猿に帽子を捨てさせて其れを拾はうとしてゐるのである。けれども、東洋諸國も其の手を喰はないだらうと思ふ。喰はないことを私は望んでゐる。

勞農露國自身が共產主義の實驗には落第して今は國家資本主義で滿足してゐると云ふではないか。一つ〱が駄目になつて行つて今殘つてゐるものはプロレタリアの獨裁政治だけだと云ふではないか。官僚政治と軍隊を造ることに成功して產業及び商業の凡ての刺戟は破壞され、そして、等しく萎靡させられた農業の天然の生產物で生活しようとして居ると云ふではないか。

で、今、日露交涉の最中、國民は冷靜に考へて、政府を監視しなければならない。露國との協商がまとまつた處が其れは一部の營利會社のために好都合になるだけで、我々日本國民全部の手に安い魚類が來るわけでもなく、石炭や材木を安價で得られるようになるわけでもない。移民と云ふ話もあるが其れに關しては、他の機會に於て云はうと思ふ。

我が國が猿にされない用心こそ肝要であらう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

# 一　一革命としての婦人運動

歴史は常に異つた事柄を語りつゝあるものだと云ふことは理由のない說だとしてツョーペンハワーは申しました。「昔から今日に至る迄異つた名や異つた服裝の下に常に同じ者が活躍して居た。無限な社會現象の變化と其の混雜の中に少しも變らないものゝ心髓が存在する。實に其の心髓は昨日も今日も亦今後も同じである。かくの如くにして洋の東西を問はず古今の凡ての出來事の中に同じものを我々は認める。事情や服裝や又は作法は異つてゐるに拘らず、何時でも何處にでも同じ人間が活躍してゐるのを我々は見るのである。」と。

一言で云へば、これは歴史は繰り返へすものだと云ふことでありますが、併し、實は、常に繰り返へして居るのでは歴史にならない。むしろ、繰り返へさないから歴史があるものだと私は考へて居ます。が、歴史的現象の裏面を流れてゐるものがある。たとへばショーペンハワーの所謂生々慾の如き。併し、それとても進化しつつあるものであることを私は信じます。又國民的信仰とか人種的精神とか云ふものも歴史的現象の裏面に流れてゐて、それが或るものを破壞しては其の後を建設

しつゝ進化しつゝあることをも私は信じます。

ものゝ內部に潛在してゐて、絕えず熟しつゝある過程があつて、そして、其の過程が熟しきつた時には外殼を衝き破る。此の破壞は革命と名付ければ各付けられるものであります。社會進化のみならず、地質學上及び生物學上の進化の方法に於ても矢張り同じで、つまり、地震は地球の今日の形を決定した一ッの要素であるとか、雛鳥が卵から出る時に卵の殼を破壞するとか云ふようなことを革命と見れば見らるゝものであります。

こう云ふ意味で、婦人運動も亦一ッの革命であると云ふことが出來ます。一定の固定した型の中へ入れられてしまつて、けれども其の型の中で進化の過程が熟しつゝあつて、そして、其の型を打ち破らうとしたのですから。

實に、婦人は完全に一定の型の中へ押し込められて居ました。そして、婦人がさうなるに付ての主もなる理由の一ッは無意識なる社會的束縛でありました。一體、無意識なる社會的束縛と云ふことは社會學の一體系となつて居る程社會上大なる力であります。つまり、私共は無意識のうちに社會から强制されて、或ることを爲さしめられたり、禁じられたりするのですがそれは强制と云つても

腕力ではなく、道徳的心理的であるのです。つまり、『こうあるべきだ』として、一定不變なものだとして或る形式を遵奉させられる。そして、それが嚴重な法律と同じように有効な社會制裁となつてゐる。

さう云ふものが、即ち、もの云はない或る勢力が婦人を壓迫し盡して居ました。けれども、丁度空氣が私共に公平に與へられて居るように凡ての婦人が最も公平に强制されて居たので、長い間婦人はさう云ふ事實の存在を感ぜずに居ました。從つて、其の眞理を發見することが容易でなかつたのです。

かくして、婦人の社會上劣等な位置、即ち男子の下婢とし、奴隷としての位置は長い間大盤石の基礎の上にシツカリと定められてしまつてゐました。

## 二 婦人運動の一大缺陷

其の大盤石の基礎をたゝき毀そうとし、其の基礎に第一のヒヾを入れようとした婦人運動は歐州に於ては今より百三十有餘年も以前に其の第一歩が踏み出されてゐたのに反して我が國ではそれが

まだ最近のものであることは周知の事實です。尤も、男女同權說と云ふようなものは今より四十有餘年以前からあるには有りますが、併し、それは本當の意味の婦人運動、つまり、既成の社會秩序に反逆して女性の尊嚴を主張し、それを有形化しようとするものではなかつたのです。

處で、此處に注意を要する點は、歐州の婦人運動にしろ、我が國の婦人運動にしろ、それは主もに女權の擴張と云ふ處に止まつてゐたと云ふことです。一體『婦人運動』と云ふ言葉は『婦人の權利擴張運動』と云ふ意味なのを云ひ易いように『權利擴張』を除いて單に『婦人運動』と云つてゐるのです。ですから、此の運動にどんなに成功した處が其れは要するに權利の問題に止まつてゐる。どんなに完全な權利が確立しても人は權利だけでは生活が滿足でない。婦人が敎育の自由、經濟上の獨立、政治上男子と平等なる權利を得れば、其れで全的に滿足が出來るかと云ふとなか〳〵さうではない。『人はパンのみにて生くるものに非ず』と云ふ言葉を應用して、『人は權利のみにて滿足に非ず』と私は云はうと思ひます。と云つて、女權擴張乃至獲得運動を無意義なものであつたと私は決して云ふのではない。虐げられ盡して居た婦人の權利擴張乃至獲得運動は矢張り進化の一過程であつたのです。ですから、其の進化の過程をもう一歩進ませることに私共は努力しなければならない。權利

擴張運動は要するに既成社會を破壞するに過ぎない。が、破壞したゞけで建設することを忘れて居るならば、不幸は婦人の上にばかりでなく人類全體の上にかゝつて來ます。

換言すれば、婦人運動が起つて以來今日迄婦人運動は唯單に道理乃至知力によつてのみ支配されてゐました。他の言葉を以て云へば既成社會の破壞にのみ沒頭してゐたのです。けれども私共の生活は道理乃至知力を超越した生命の法則によつて支配されてゐます。ですから、其の生命の法則に遵奉しての上で道理乃至知力の支配を受けるならば私共の生活は全的に滿足なものになるのですが今迄の婦人運動は其の點を閑却して、道理の範圍内に於て凡てを處理しようとして居た。此處に大缺陷があり、やゝもすれば世人の反感を買はなければならなかつたのです。

## 三　生命の宗敎ご婦人運動

生物學者は單に生命現象を取り扱ふのと同じ方法、同じ原則を以て人間社會生活の現象を説明します。つまり、人口過剩を必要條件とし其の過剩人口のうちに生存競爭となつて働いてゐる自然淘汰の原則を生物學者は認めて、そして弱者が除去され强者が生存することによつて社會生活は精選

され牢固になつて行くと云ふのす。

併しながら、前段に於て云つた生命の法則は社會全般の利益を目的として働くもので、社會員則ち個人は其の目的のために手段として用ひられるのです。けれども、個人は社會の手段とされること、則ち社會の犧牲にされることを容易に肯んじません。個人のうちに存在する道理則ち知力が一個人は一個人だとして、自己を主張し、自分のために生活しようとし、自己を樂しませようとし、生命の法則に反抗し、社會に反逆しようとします。社會は社會、自分は自分だと云ふ考へに固執しようとします。けれども結局、其の反逆的な道理は生命の法則に征服、則ち社會化されてしまひますが、生命の法則が其のように強いわけは其れが國體の安全と云ふ宗教――國民的信仰と云つてもよい――と共力するからです。

ヘーゲルの自發活動、ショーペンハワーの意志、ヘツケルのアトムソール、宇宙のたましひ、自然の精神、宗教又は科學の第一原因なる所謂神などゝ云ふ言葉によつて云ひ現されてゐるものは要するに此の信仰です。此の信仰の力が生命の法則を援けて社會に反逆しようとする個人を征服して社會的とします。そして、此處に進步がります。

一方には、又、社會は道理の生産物であると云ふ見方があります。そして、これは今日の多くの社會學者の意見です。つまり、人間は生來相殺し合ふものであるが知力の發達によつて相殺し合ふ代りに共同するようになつたと云ふのですが、併し、これはいはゞ半面の眞理です。社會は、排他的な利己主義的な知力乃至道理を統御し社會に奉公せしめ、そして、勝利を得た生命の法則の生産物であると私は信じます。

利己的な反逆的な道理乃至知力は反動力であつて既成社會の全部、或ひは、一部に不條理な點を見出し、其れを破壊しようとするものです。道理は時によれば非常に懐疑的になりますが、併し、其の破壊的たることは同じです。破壊である以上、其れは斷じてものゝ終局ではありません。破壊の後には眞ぐに建設がなくてはならない。そして、建設は常に道理を征服し利用することであり、且つ、前に云つた國民的信仰則ち宗教の絕大なる力が加はらなければならぬのです。

實に、人間社會の進化は第一義的には知力的のものではなく、宗教的のものであつて、そして、進化のうちに存在しゐる合理的な要素を國民的の信仰が支配した時に實現するのてす。

## 四　破壞より建設へ

さて、今日迄の婦人運動は前述の意味に於て單なる破壞事業であつたのです。婦人のために甚だ不合理な不利な點、則ち、既成社會の一角を道理の力によつて、歐州に於ては破壞したのであるし、我が國に於ては、今、破壞しつゝあるのです。けれども、それは單に破壞であることを忘れてはなりません。

世界平和の呼び聲が盛んであるにも拘らず國際關係は益々險惡になり、又は、昨日の大都會が今日は灰の山になると云ふ混沌たる狀態の中を喘ぎながらも私共人類は進步の軌道の上をたどつて行かねばならない。そして、複雜な此の社會を整理し、福利を增進し、益々進めて行くために後から〱戰鬪員が生れて來ます。けれども、其の戰鬪員は生れた時には實際生活に付ては何にも知らない。人間としての最大なる幸福に付ても、最も貴い獻身的の仕事に付ても、深刻な苦しみに付ても、其の外凡ての事に付て何にも知らない。其の何にも知らない者を生存競爭上の勝利者とし、人類の進步に貢獻あらしむる者と爲さうとする强い望みを持つて如何なる苦痛をも耐へ忍ばうとする者は

母であります。ですから、人類の進歩は、此の世界の文明は母の手に支へられてゐると云ふことが出來ます。今日迄の文明を創造した人物は偉大であります。けれども、文明の創造者を生み育てた母はより偉大であります。聖母マリヤが崇拜される理由は此處にあるし、エレンケーの母性尊重母性の復興も其基礎は此處にあると思ひます。

母性尊重と云ふことは生命の法則に適ふものであり、同時に、建設的、創造的であります。歐米婦人の大部分が道理に走り、破壞をこととし、母性を輕んじ、他の言葉を以て云へば、生命の法則の働きをむしろ第二義的のものとして居たのに反し 、我が國の婦人はまだ、それ程知力が發達して居ないために、破壞的の道理を第二義的とし、生命の法則を第一義的のものとしゐる傾向はむしろもつけの幸ひです。唯其れが盲目的であるから有識なものとしなければならない。我が國の婦人運動は、既成社會の婦人のために不合理な部分を破壞すると同時に建設的な生命の法則を遵奉する精神をより強くして歐米の婦人運動に後れた點を補はなければならない。

道理と云ふ戰鬪力が破壞した後を受けて建設に從事するものは生命の法則に適つた自覺した母性であることを提唱して、つまり、權利のための權利でなく、優良な母性が一切のもの丶基礎である



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

と云ふ國民的信仰の上に、母性のための、婦人參政權をも含めた女權獲得、則ち、政治上、經濟上、倫理上の母性の勝利と云ふことが向後婦人運動の焦點であらねばならぬと私は信じます。

## 漸く全力を擧げて研究する境に到達した私

六月二十三日の國民新聞紙上で梅山一郎氏は婦人界に於けるお歷々の名を連ね、其の功績をかゝげた後、評論家としての與謝野晶子、山田わか兩氏の生命は既に過去のものになつて來たようだ』と云つて居られる。私は其れを見て所謂微苦笑を禁じ得ず『戯談じやない！』と口ばしつた。

なぜなら、山田わかと云ふ名が世間の目にはどう映つて居たか自分にははつきり分らないが、とにかく、自分では評論家であつたなどとは思つて居なかつた。折りに觸れての感想を述べたり、又は、原稿料の慾しい必要に迫まられたりして書いて居たが、併し、此の頃では子供等が皆大きくなつたので『さア、これからだ』と云ふ意氣込みで此の頃の私の生活は勉強が主になつてゐるのである。過去に於て私が持つて居たように梅山氏が云ふ所謂生命なるものはこれから生まうとして居るのである。

人間の精神力乃至知力は朝咲いて數時間後に萎れる花、又は、朝生れて晩に死ぬ蟲ケラの生命よりは長續きのするもの、又、せねばならぬものであるのに、一時を誇る儚ない花のように人の目に觸れ、短い生命を咲きくらす夏の蟬のようにガン／＼人の耳を打つて居なければ、もう死んだもののように思ひ込む梅山氏の淺見を私は氏のために悲しむ。且ツ『もう過去のもの』と云ふような人を葬むるような言辭を用ゆる時には『これ／＼であるから』と云ふ證據を擧げないことには、それが慢罵になつてしまつて御自身の人格にも影響することを序でに御注意して置かう。

專門的な個々の學問又は藝術などと違つて婦人問題と云ふような女性生活の一生に影響するような、根本的に人類の生命を左右するような事柄に關しては、先づ、原則として、人として婦人としての經驗を一通り嘗めつくしてから確固とした見識が備はり、其の上での研究乃至運動こそ本當に有益な、人類をうるほし得る、つまり、婦人運動の使命に叶つた強い力となり得るのである。

折角、有益な芽がふいても所謂男子有識者乃至新聞記者に煽て上げられたために、弱年の悲しさ、ツイ心が增長して其の芽を枯らしてしまつたと云ふ例は隨分少なくないのであるから、さう云ふ罪惡をなるべく避けるように、そして、餘り淺薄な斷定を下して、人を誤まらせないように、所謂有識男子乃至新聞記者諸士に此の際御賴みして置く。

# めッき生活の流行

ひところ、其れは今から十七八年も前、私共が米國から歸つて間のない頃であつた。日本婦人の髮のかたちに余まりに變化が無いこと、婦人が百人あつまつても千人よつても丸髷か島田か銀杏返か、さもなければ、きまり切つたかたの束髮であるので、日本婦人の不趣味又は智慧の無さを笑つてゐる人があつた。けれども、此の頃の婦人は趣味の向上か柢下か、智慧の發露か墮落か、それは別問題として、とにかく、髮のかたちの種々樣々であることよ。そして、耳かくしが問題になつてゐるなどは、むしろ、滑稽である。

が、まだ、十だいであるように見ゆる水々した娘なら、どんな恰好をしても其れが新奇を好む發剌とした氣分の現れであるように思へて、たとへ、それが變てこであつても其の無邪氣さをほゝ笑む心持ちにもなれるが、併し、四十を越へてゐるような婦人が妙に髮をひねくつて、厚化粧をして華美な服裝をして、遠目からは二十だいに見へるような恰好してゐるのは實際見て余まり氣持ちの

よいものではない。頬の皺をかくすため姿態の硬化を目立たぬようにするための其の心遣ひは大抵なことではないだらうと思ふと肩が凝つて來るような氣持がする。

そして、それと同じ意味の者が今の所謂新人、所謂文明批評家と稱する者の中に少なくないことをも私は認めてゐる。彼等は、彼等自身が古い人間であるにも拘らず、其の古さをかくすために、あちこちから新しい言説を拾つて來て、それに共鳴したような顔をしたり、世間へ紹介したりして、其れで新人であるかのような顔をしてゐる。

けれども、其れがめつきであるからうか／＼すると剝げてしまつて正體が暴露するから、若く見せようとする初老の婦人が化粧に苦勞するように、さう云ふ種類の新人は新しい思想を漁るのになか／＼苦勞であり、忙しい。

で、初老の婦人が遠目を欺き得るように其等の新人も彼等の文章を讀んだり、又は、壇上に言説を聽くだけの人々を欺くことは出來ても、併し、彼等に接近して親しく彼等の生活樣式を知る人々迄をも欺くことは出來ない。

そんなら、本當の意味の新人とはどう云ふ者かと云ふと、それは思想的に成長しつゝある人であ

ると私は思ふ。

生命のない枯れた樹木を綠色のペンキでどんなに塗り立てゝも、それは外部から喰付けたものであるから、絶へず、塗つてゐなければ綠色は保てない。のみならず、腐敗はしても成長と云ふことはない。これに反して、生命のある樹本は、いつも變らないような恰好はしてゐても、時が來れば新芽をふいてそして成長して行く。

それと同じで、新人とは自分の實生活を知識の出立點として、そして、世間との接觸によつて其の知識を建全に育てゝ行く人である。猶、云ひ直せば、自分の生活と思想を社會的に育て、人格を大きくして行き、そして、新しい思想を生む、つまり、新芽をふいて行くのが本當の意味の新人なのである。外界から新しいことを拾つて來る人は新人ではなく、それは、孔雀の羽毛を借りる烏である。

本當に若いのか、ごまかしの若さかは接近すれば分るように、本當に新しいのか、ペンキ塗りの新しさかは其の人の實生活を直視すれば直ぐに分る。

# 婦人子供洋服仕立
## 和服仕立
## 毛糸編物仕立

◆御約束の時日までに必ず御仕立致します

◆丈夫な材料が取揃へて御座います

◆材料を御持合せでしたらお仕立だけさせて頂きます

◆お手紙を頂けば早速參上致します

◆御希望の方々には御教授致します

東京府下東中野　栗田かつ　（字原）一七九六


### 本誌臨時定價表

| | |
|---|---|
| 一冊 | 金十錢　送料五厘 |
| 六冊 | 前金五十五錢（送料共） |
| 十二冊 | 前金壹圓（送料共） |

▲雜誌代及郵稅は前金の事▲御送金の際は振替貯金東京五三六八八番に御拂込みのこと▲郵券代用は五厘切手にて一割増▲廣告は御照會次第御相談いたします


大正十三年六月廿三日印刷納本
大正十三年七月一日發行

東京市四谷區南伊賀町四一
編輯兼發行人　山田嘉吉

東京市牛込區山吹町一八九
印刷人　大杉直次郎

東京市四谷區南伊賀町四一
發行所　婦人と新社會
振替東京五三六八八


Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN